

デイドロにおける技術思想・再論

竹村 孝雄

筆者は、デイドロが『アンシクロペディ』(一七五一―七二年)の編さん之際して、技術とりわけ生産技術——かれ自身の表現によれば機械技術 (*arts mécaniques*)——に関する項目の集録に非常な関心と努力を傾注した事実に着目し、かれの思想の全体的な生成・発展の過程におけるその技術論の意義について、『アンシクロペディ』第一巻(一七五一年)所収の項目『技術(Art)』を中心に若干の考察を試みたことがある。そこでは、かれの技術論が、その哲学における認識論の深化の一つのプロセスであつた点を指摘するとともに、生産技術の改善の要因として、デイドロが生産過程への機械(器具)の導入と分業の利益とに注目した事実を明らかにした。しかしながらデイドロの技術思想は、かれの政治思想、経済思想を理解する上で重要な意味をもつと思われるので、本稿では再びデイドロの技術思想をとりあげ、多少とも立ち入った検討を加えて筆者の今後の研究のための覚書としたい。

(1) 拙稿「デイドロにおける技術思想——項目『技術(Art)』を中心とする一考察——」(『一橋論叢』第五一卷第三号)参照。

(2) ブノーは、「人民古典文庫」、「デイドロ著作集」第六巻、『政治論集』を編さんするに際して、同第二巻ならびに同文庫の一冊に含まれている『アンシクロペディ項目選集』(*Textes choisis de l'Encyclopédie*, éd. par A. Soboul, 1952)にデイドロの政治、経済関係の項目が収められているという事情も然ることながら、『アンシクロペディ』当時のデイドロの論稿が余りにも抽象的で、「当時の思潮ないし数多くのそして若干無秩序な読書」からひきだした一般的な見解にとどまっているのでこれを除き、デイドロの政治思想の形成を一七六〇年から七〇年の時期に求めている。Diderot: *Textes politiques*, Paris, 1960 に付したかれの序論“Diderot et la politique de l'Encyclopédie au manifeste philosophique,” pp. 8-9 参照。しかしながら筆者は、デイドロの政治、経済思想の生成は、やはり『アンシクロペディ』刊行の時期に求めるべきであろうと考える。そしてその際に問題となるのは、デイドロの技術思想の意義をどうみるかということであろう。

デイドロが技術とりわけ生産技術の諸問題に接触するようになった契機は、かれが出版業者から『アンシクロペディ』の編

集を委ねられたという事情に求められよう。⁽³⁾ いいかえれば、デイドロは特定の生産に関連をもつ経営者ないし職人⁽⁴⁾としてではなく、また、たとえばレオミュール⁽⁵⁾のような学者ないし素人好事家⁽⁶⁾としてでもなく、さらに産業行政の一翼を担う官僚としてもなく、諸科学、諸技術の集大成を図ると同時にそれら諸科学、諸技術相互間の連鎖関係を明らかにすることを目的としたのである。このことはあらためていうまでもないことであるが、デイドロの技術思想を内在的に理解しようとする場合には重要なポイントであるように思われる。

たとえば『アンシクロペディ』の技術関係の内容に照明をあてたジルは、ダランベールの言葉——すなわち「科学については余りにも書かれてきており、自由技術の大部分については充分とはいえないまでも書かれてきているが、機械技術についてはほとんど書かれていない」、「機械技術よりも自由技術に優位性を認めることは、多くの点で当を得ないであろう」——をとらえて、事實は「産業労働の名誉回復の要は多くの秀れた精神によって認められてすでに久しかった」とし、具体的な技術関係の文献が十六世紀以降、かなり豊富に存在することを指摘して『アンシクロペディ』が内容的にそれらの文献の水準を多く超えていないことを論証する。そして結論的に、「技術の辞典」としての『アンシクロペディ』は「価値のある資料と並んで、……日常の習慣と化している製法、多かれ少なかれ秘密とされる理由のあった製法、しばしば時代おくれとなっている技術的

伝統、の輝かしい集大成⁽⁶⁾に過ぎず、「イギリスではすでに『産業革命』に入りつつあり、そしてフランスにおいても若干の人々はそれを予見していたが、アンシクロペディストは、この部類のフランス人には含まれない」という。

たしかにジルの強調するように、「アンシクロペディ」があらゆる領域における進歩の開始の時期を劃した一例としての「諸技術の記述」の部分が参照されるのは行き過ぎであろう。ブルーストの研究も同じ結論に達している。ところでジルは、『アンシクロペディ』の技術関係の項目が相対的に低い水準にとどまつた原因として、既存の技術関係の文献・資料の意義を全面的に否定する「傲慢 (Presumption)⁽¹⁰⁾」な態度から当然ひき出されてくる方法である、生産の現場の实地調査が、デイドロ自身が誇るほど充分には行なわれていず、むしろ旧来の文献・資料に依拠している事例が多いこと、また实地調査が行なわれている場合でも、それは「秀れた民間伝承の調査」ではあり得ても「技術全書」という明確な概念に支えられたものではなかったこと、けっきよくはデイドロ・ダランベールの真の意図が「あらゆる技術的知識のエグゾースティヴな集大成を目的とせず、……(デイドロが項目『技術』で論じているように、技術の) 歴史的側面、科学と技術との関連と相互に与えあう諸寄与、……技術の用語の問題」等を明らかにすることにあつたということ、を指摘している。とくにジルの挙げた最後の点の「記述」を不完全ならしめているということにはかならない

が、果してこのような立場で『アンシクロペディ』における「諸技術の記述」の歴史的な意義がとらえ得るであろうか。

ジルはまた、「デイドロにとって真に技術と考えられたと思われる伝統的な、ほとんど機械化されていない手仕事に関しては、大へん鮮かに記述されている」のに反し、「蒸気機関の問題がほとんどないがしろにされている」と論評する。もとよりかれは、項目『火(Feu)』の末尾でそれが取扱われていることは認めているが、その図解はわずか五図でかたづけられ、たとえば轆轤細工人に関する項目には極端に詳細な図が八七も付されているのに比べれば不均等もはなはだしく、アンシクロペディストの技術観が如実に示されているという。ブルーストによれば、ダランベールの手になる項目『火』は、パパン(Papin, Denis, 1647~1714)のピストン付蒸気機関(揚水装置)の考案の経過さらにイギリス人によるその改良の経過を要約しており、項目の末尾にデイドロによって、ペロネ(Perronet, Jean-Rodolphe, 1708~94)のメモワールが紹介されている。しかしイギリスやオランダで鉱山の揚水作業に用いられていたこの機械 *Pompe à feu* は、当時フランスには一二台しかなく、しかもイギリス式庭園の撒水に用いられていたに過ぎず、真の意味で「有用」であるというより「珍らしい」⁽¹⁴⁾なものであった。そしてジルの高く評価するレオミュールのような人をもつてしても「この機械が小さくて、労働を節約しようと思うところではどこでも利用できるように携帯可能なものであると有用で便宜である」というようなうけとり方であったのである。事

実、この *Pompe à feu* は、動力としての人間の力を補うだけであって、近代的な意味での機械ではない。マルクスが指摘するように、「十七世紀の末、マニユファクチュア時代中に発明されて十八世紀の八十年代の初めまで存続したような蒸気機関そのものは、何らの産業革命もよび起こさなかった」のであり、「むしろ反対に、道具機(Werkzeugmaschinen)の創造こそ蒸気機関の革命を必然たらしめた」のである。デイドロが生産技術の改善のためにその導入を提唱した機械は、まさにこの意味において「道具機」であって、それは「産業革命によってまず第一におそわれる」性質のものであった。⁽¹⁵⁾

アンシクロペディストとしてのデイドロにとっては、職人に特定の製造技術を教えることが課題であったのではない。ただし「職人を形成するのは手仕事である。そして手仕事を学ぶのは、けっして書物のなかにおいてではない。」したがって職人が『アンシクロペディ』に期待し得る、そしてむしろ期待してほしいことは、「おそらくかれらがけっしてもったことのないであろう見方、そして何年もの間の労働の後ではじめて行ない得た諸観察に遭遇できる」(傍点・引用者)ということである。いいかえればデイドロは、フランスの生産力の一覧表——諸技術の集大成——を提供すると同時に、個々の生産技術の経済生活において果す役割の確認——機械技術の名誉回復——ならびにその全体のなかにおいて占める地位——諸科学、諸技術の連鎖関係——を広汎な大衆に示そうとしたのであり、それは「その対象を最も広い局面のもとに考察すること、すなわちその国

民のエスプリを知り、その傾向を察知し、それに速力を与え
る」という「普遍的にして理性的な辞典」の課題にほかならな
かったのである。

(3) デイドロが刃物職の親方の子であった、という事実も
この背景として無視できない。「デイドロが機械技術に対
する偏見に立ち向ったとき、かれの内面で語っているのは、
その生家の職人としての長い血統である」(Billy
André, *Vie de Diderot, Édition revue et augmentée*,
Paris, 1948, p. 106)。ゆかにデュムロの哲学の先駆者であ
るヌーロンはもとより、デイドロがその形而上学に対して
は鋭く対立するデカルトも「生産の姿態の変化および人間
による自然の実践的支配を思维方法の変化の結果とみなし
た」(Marx, Karl, *Das Kapital, Erster Band*, in Marx,
Engels Werke, Band 23, p. 411。長谷部訳、角川文
庫版第二分冊一六二頁)のであり、かれが哲学に導入
した方法により「生活にとり極めて有用な知識に到達する
ことができ、そして学校で教えられるかの思弁哲学の代わ
りにこの知識の実践的応用を見出すことができるのであ
り、これによりわれわれは火・水・空気・星そのほかわれ
われをとりまく一切の物体の力や作用を、わが手工業者た
ちの様々な職業と同じように正確に知ることによつ……
自然の支配者および所有者となる」(Descartes, *Discours
de la méthode*, éd. par Maurice Dorolle, Classique
Larousse, pp. 55—56) といふのである。デュムロが技術の諸

問題にとりくんだ背景にはこのような十七世紀以来の哲学
の流れの上で形成されつつあったかれの哲学があったこと
はいうまでもない。この点については筆者は「不十分なも
のながら拙稿「デュムロにおける『アンシタロンデュ』—
—その思想形成における意義について』の覚書——」(『一橋
論叢』第四九巻第六号)で簡単な展望を試みた。

(4) レキッコールは十七一年「マサチマー・デ・アン
クシオ pensionnaire mécanicien に就任せし」Description
et perfection des arts et métiers の編纂に委ねられ
た。Toriats, Jean, *Un esprit encyclopédique en de-
hors de «l'Encyclopédie»*. Réaumur, d'après des do-
cuments inédits, Paris, 1936, pp. 43—54, Cole, Arthur
H. and Watts, George B., *The Handicrafts of France*,
as recorded in the *Descriptions des Arts et Métiers*,
1761—1788, Publication Number 8 of The Kress Li-
brary of Business and Economics, 1952, pp. 7—10 参
照。

(5) Gille, Bertrand, “L'Encyclopédie, dictionnaire
technique,” in Centre International de Synthèse,
L'“Encyclopédie” et le progrès des sciences et des
techniques, Paris, 1952, pp. 187—188。またルノーヌ
デュムロの研究を『アンシタロンデュ』の技術の部分に奉
じた論文「アンシタロンデュ研究」(Proust, Jacques, *Diderot
et l'Encyclopédie*, Paris, 1962, p. 163, n. 1.) を評論す

るが、かれの研究は事実上ミルの研究を批判しつつ乗り超えたものである。

- (6) Gille, art. cité, p. 192.
- (7) Gille, art. cité, p. 202.
- (8) Gille, art. cité, p. 189.
- (9) Proust, ouv. cité, p. 202. 「諸技術の記述」は「十八世紀中葉のノランヌにおおつて用ゝられていた製法のかなり正確な反映」である。
- (10) Gille, art. cité, p. 191.
- (11) Gille, art. cité, p. 192.
- (12) Gille, art. cité, p. 194.
- (13) Gille, art. cité, p. 202.
- (14) Proust, ouv. cité, pp. 166~167.
- (15) Machines et inventions approuvées par l'Académie des sciences depuis son établissement jusqu'à présent; avec leur description, periode 1666~1734, t. VII, p. 253, cité par Proust, ouv. cité, p. 167.
- (16) Marx, ouv. cité, pp. 395~396. 長谷部訳第二分冊九回ページ。
- (17) Marx, Ibid., p. 395. 参照。
- (18) 『ドクメンタル』Oeuvres complètes de Diderot, éd. par J. Assézat et M. Tourneux, t. XIII, p. 143. 以下、このドクメンタルの引用は AT と略記する。

(19) 項目『アンシタロネディ』AT, t. XIV, pp. 426-427.

三

ところでデイドロは、技術の起源を「あるいは生存上の要求、あるいは奢侈心……などにより、自然の所産に加えられる人間の働きかけ」に求め、技術を定義して「同一の目的に協力するものもの道具」と述べている⁽²⁰⁾。かれがここで、たんに「道具」といわずに「目的」、「協同」、「規則」の諸概念を含ませていることに注目すべきであろう。「目的」という以上、そこに主体としての人間の意識的な活動が予想され、「規則」という概念には自然科学における法則のごとくつねに客観的な妥当性がみられるとは異って、実践のなかにおいてのみ、妥当し、作用する、ということが考えられているのである。したがって生産技術の改善、進歩は「道具機」の導入によつてのみ可能になるのではない。「道具機」の導入はその一つのモメントに過ぎず、「比較的簡便な操作」、「素材の節約」、「時間の延長」(＝単位時間あたりの能率の向上)、熟練等の側面における工夫、発見を試みるものが所期の効果をもたらすのであり、それは、数多くの労働者間の競争を媒介に、労働者や職人が経験を「反省し結びつける」ことによつて可能となるのである⁽²¹⁾。

デイドロの技術思想の特色は、そしてその意義は、実はこの生産の場における競争こそが、生産技術の進歩、生産力の発展の必要条件としてとらえられている、ということにある。そ

してこの点にこそディドロの技術思想が、政治ないし政治経済学の問題領域に入ってその政治思想、経済思想を形成していく可能性をもち、同時にその性格を規定していくのである。

この点の立ち入った検討は後日に譲らなければならないが、以下、一つの展望を試みてとりあえず本稿を終えたいと思う。

『アンシクロペディ』所収の匿名の項目『マニユファクチュール』は分散マニユファクチュール (manufacture disperse) を定義づけるに際して「各個人が自分自身のためにそこ〔マニユファクチュール〕からひきだす利益以外の利益は眼中になく、そこで働き、かつ各個人がおのおのの競争するような、あらゆる人々から構成されている」(傍点・引用者)ものとしていることがここで想い起こされてよい。これに対して集合マニユファクチュール (manufacture) は「政府によって保護され」なければならない。⁽²³⁾ ここで集合マニユファクチュールといわれるものが、事実上、コルベルティスムの所産である特権的マニユファクチュールであることはいうまでもない。そしてそれは「重商主義的貿易体制」の確立という政策目標のために、ギルド制を基軸にうちたてられた「産業規則体系」の一環として、ギルド共同体と深く絡みあっていたのである。⁽²⁴⁾ たしかにコルベルルとしてその継承者は、生産技術の改善、進歩に意を用いた。しかしながら右のような体制そのものが、「技術の研究を促進すると同時に逆に制約する」⁽²⁵⁾ 要因となっていたのである。

事実、ディドロはギルド体制の桎梏のもとに製造技術の進歩がそこなわれていること、そして職人が秀れた技術を導入しよ

うとすれば、「みずから徒弟となるか、あるいは信頼の出来る人を徒弟として〔他の親方のギルドに〕もぐり込ませるか」のいずれかが最も簡単な方法であるが、この方法はほとんど期待し得ないこと、したがって原理的に「いつさいの秘密を例外なく公開する」ことが必要であって、「政府が、マニユファクチュールに入り、労働者と対談し、道具、器械そして工場そのものも写しとることを認めることが望ましい」と述べている。⁽²⁶⁾ ディドロはさらにこの意見が必ずしも万人のうけいれるところとはならないであろうこと、「人類の運命について無関心な、そして自分の利害を超えてみようとしないうで小さな社会にはまりこんだ狭隘な頭脳を持ち主、悪く生まれついた魂の持ち主」の存在することを認める。「これらの人はみずから良き市民 (bons citoyens) と称したがっている。もしかかれらを悪人 (méchants hommes) とよぶことを〔同時に〕認めてくれるなら、それに同意しよう」。⁽²⁷⁾ この発言は、一見、道徳的な批判のようにみえるが——というよりもかれの道徳論の性格が如実に示されているというべきであろうが——、ここでいわれている「良き市民」が実はコルベルティスムの体制下における括弧つき「良き」市民であることに注意を要しよう。そのかぎりでの「良き」市民の楯の反面は「悪人」なのである。なぜか。それはかれらのいうところをきけばうなづけることである。すなわち

「諸技術の一般史は、君主の図書館に注意深く、そして関係者以外は近づけないように収められる立派なマニユスクリプトでなければならず、それは国家のものであって人民のものではない

い。国民の諸知識、その秘密とすべき紀要を公にし、その工夫、術策、資源、奥義、理性の光、技術その他いっさいの知恵を公開して何の役に立つのだ。それらのことがらは、終始競争的な近隣の国々に対するわが国の優越性の一部を為していることではないか。かれらのいうところはこのようなことなのである。」

以上ではほほ明らかのように、デイドロは、生産技術の進歩・生産力の発展という視点から、ギルド共同体を基盤とするコルベルティスムの狭隘なナショナリズムを批判する。周知のように、十八世紀中葉のフランスにおけるコルベルティスム批判は、ケネーを始祖とする科学的経済学としての重農主義の生誕をもたらずのであるが、「アグリカルチュラル・システム」からのケネーのコルベルティスム批判と、生産力視点からのデイドロのコルベルティスム批判との相互の関連と異同が、デイドロの経済思想の解明に重要な意義をもってくるであろう。この点の検討は後日を期さなければならないが、特徴的な事実として指摘し得ることは、ケネーが、農業をもって「純生産物」(product net)を創造する唯一の生産的な産業とし、商工業を不生産的なものと考えるのに対し、デイドロが、ケネーの所に多くの影響をこうむりながら、なお完全にそれに与することができなかつたといふことである。⁽²²⁾

(20) 項目『技術』AT, t. XIII, pp. 360 et 362.

(21) 三枝博音『技術の哲学』東京、一九六〇年、二六〇～

ージ参照。

(22) 項目『技術』AT, t. XIII, p. 372 参照。

(23) *Encyclopédie*, t. X, p. 60.

(24) 中木康夫『フランス絶対王制の構造』東京、一九六三年、第三章参照。

(25) Proust, *ouv. cité*, p. 191.

(26) 項目『アンシタロジック』AT, t. XIV, p. 492.

(27) 同『AT, XIV, p. 493

(28) 同『AT, XIV, p. 493

(29) 穀物取引の自由をめぐるガリアニとモルレとの論争に際して、デイドロはこの点に関する自己の見解をいっそう鮮明にし、工業もまた生産的であること、そして工業における純生産物は労働の生産物にはかならないことを示唆する (Diderot, *Apologie de l'abbé Galiani*, in Diderot, *Oeuvres politiques*, éd. par P. Vernière, 1963, p. 97. 小場瀬卓三『デュロ研究』上巻、三八二～三八三ページ参照)。問題は、後のデイドロの見解を規定する『アンシタロベディ』時代のデイドロの経済思想である。ちなみに、ブルーストは、形成期のケネーの影響とともに、「動的的重商主義」(mercantilisme dynamique) のそれをとくに重視している (Proust, *ouv. cité*, pp. 453 et seq.)。

(一九六四・六・三〇) (一橋大学大学院学生)